
短編集04 【Life-Live】

高岡たかを

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集04【Life—Live】

【Nコード】

N7170T

【作者名】

高岡たかを

【あらすじ】

恋愛ものを中心にした過去短編集。
一部作品に不快な性描写あり。

十二月二十八日の雪 ver3.0

——久し振りに彼女を見た。

ずっと伸ばしていた髪を短く切り、俺の知らない服で着飾った彼女。

奥のテーブルで楽しそうに笑う彼女を見て、俺はフロアを離れた。

非常口を兼ねる通用口の重い扉を開けると、冷たい空気が流れ込んできた。

非常灯の弱い光だけが光源の薄暗い複合ビルの谷間。開けたドアはその二階の踊り場に繋がる。

両手にゴミの袋を持った俺は、錆びた非常階段を下りて、階段の裏に置かれたダストボックスの中にゴミ袋を押し込んだ。

そこでやっと少しだけいつもの自分が帰ってきた気がした。

暖冬の影響だろうか。クリスマスも過ぎ、今年も後三日で終わるというのに、この街にはまだ雪は降っていない。

ありがたくもあったが、雪が降らない程度に冷え込む生殺しにも似た中途半端な寒さが、鬱陶しくも思う。

凍える体を自覚して、手に白い息を吐きかけ擦った。硬くなった掌同士が擦れて小さな音が出る。

笛の音のような音を連れ、ビルの間を抜ける冬の風は冷たい。

居酒屋の薄い制服如きではこの寒さを到底凌げるはずも無く、俺は思わず身を縮ませていた。

すぐに職場に戻ろう、と階段に足を乗せるが、何故か一步が重く苦しい。

理由は分かっていた。

自分の知らない今の彼女に、今の自分の姿を見せたくないのだ。逡巡の末、結局そこに座り込んでしまう。

夜気に冷やされて氷のように冷たくなった階段は、容赦なく薄いズボンを突き抜けて尻を刺す。

空いた手に仕事を与えるように、ズボンのポケットから皺くちやになったタバコを取り出し、火をつけた。

せめて、このタバコを吸い終わるまでここでこうしていようと思った。

精一杯の『甘え』を口に咥え、正面に目をやればコンクリートの狭間の向こう、色とりどりのイルミネーションに飾られた賑やかな夜の繁華街が覗いている。

ここはこんなに薄暗いの。

「――湯浅さん？」

声がした。

「堀川さん」

すぐに後ろへ振り返ると、俺が腰掛けた階段の上、二階の踊り場に、俺と同じ居酒屋の女性用制服に身を包んだ女性――堀川絢子の姿があった。手にはやたらとストラップが付けられ重たくなった携帯が握られている。

「どうしたんですか？　ボーっとしちゃって」

最近、バイトで入った彼女の声はいつも明るい。だから俺は笑って吸いかけのタバコを彼女に見せて言った。

「見て分かんない？　サボってんだよ」

「うわ。悪い先輩だ」

「まあ、このタバコが吸い終わるまではね」

用は済んだのか携帯をエプロンの下に仕舞うと、笑って堀川さんは俺の横に座る。どうやら彼女も暫くここに在る気らしい。

狭い階段の同じ段に腰掛けたせいだ。何となく肩を寄せ合う形になった。

堀川さんは寒そうに手を擦ると、膝を抱えるように身を丸める。

黙って紫煙を吐き出す俺。

——そう言えば、何年か前にもこういう事があった。

冬の夜、バスを待つ彼女と並んで座ったバス停のベンチ。

『寒いねえ』

ほんのりと頬に朱が差した彼女が、少し笑いながら言った。

お気に入りの厚手のコートを着ていても寒がる彼女はウサギみたいに凍えながら俺のすぐ傍にいて、俺は石像みたいに黙ってタバコを吸っている。

電灯の灯りをほのかに白く返す雪が、ちらちらと降っていた。

彼女は寒がりなくせに妙に雪を好んでいたと思う。

バス停の小さな屋根から手を伸ばす彼女。

クリーム色の毛糸の手袋の上に、雪が薄く積もりはじめた。闇に絡んですぐに溶ける白い息。

八重歯が覗く穏やかな笑顔。

『えいっ』

油断していると、小指の先ほどの大きさの雪玉が飛んできた。
顔を目がけて。

至近距離から投げられた雪玉は、寒さで引きつった頬にあたり、
ペチンと情けない音をたてた。

『……冷たい』

『セイくんはこんな時でもクールですなあ。ちよつとは「やめりよ
ー。やめちくりー」とか言ってみれば可愛げもありますぞ』

『……キャラじゃない』

『そだね。セイくんはそんなキャラじゃないよね』

小さく笑った彼女の横顔。少し俯いただけで、長い髪に遮られ、
弱いバス停の灯りはもう届かなくなった。

『雪、なんだか蛭みたいだねえ』

透明な声に見上げた夜空。

雪が踊る夜は、どこまでも澄んでいた。

『雪は春になったら消えてしまうよね』

彼女は言った。

いつかは儚く消えていく雪も、そこにあつた証が残る。たとえ春
になり雪が溶けても、後に芽吹く草木は雪があつた事を忘れはしな
い、と。

『……詩人だな』

俺は苦笑し。

『時に人は詩人になるのですよ』

彼女は笑い。

何の前触れもなく傾いてきた彼女の頭を肩で受け止めた。
小さな滴を幾つもつけた毛糸のマフラーから冬の匂いが香る。

『寒いねえ』

『そうだな』

『寒いねえ』

寄せられたのは身体と重さだけじゃない。

コート越しに伝わる温もりも。

白い吐息越しに伝わる心も。

彼女がくれる。彼女からくれる。

いつだってそうだった。

俺は受け身で、タバコをふかしながら、一步離れて彼女の言動を眺めていた。それが常だった。

だからか。俺は彼女が抱いていた不安の正体に最後まで気付けなかった。

バカな俺は、このとりとめのない、他愛ないやり取りが、いつまでも続くものだと思っていたのだ。

「……ホント寒いな」

思わず口をついていた。

記憶の中、自分が彼女の隣で言った言葉。

それに答えたのは記憶の中の彼女ではない。

今、隣にいる堀川さんだ。

堀川さんは鼻水が出るのか、さっきからしきりに鼻を吸っている。

「本当に寒いですね。なんか今日か明日あたりに雪降るらしいですよ」

「そうなの」

俺は苦笑して頷く。

「雪、嫌いなんですか？」

「どうかな？　好き嫌いで考えた事ってないな。でも……積もればいいと思う」

「どうしてです？」

「そう言う気分だから、かな」

「それ変ですよ」と心底不思議そうにそう言った堀川さんの顔が、仰ぐように夜空へと向いた。

つられて顔を上げる。

半分程、非常階段の鉄骨に遮られてはいたが、コンクリートの灰色に挟まれた細く暗い空が見えた。

浮かぶのは、あの一瞬。

つい十数分前の出来事だ。

もしもあの時、彼女と目が合っていたら――。

自分は彼女に何か言う事が出来ただろうか？

あの日積もった記憶と言う名の雪が、今もまだ自分の内に思い出として残っている事を。

彼女が自分の心にいた『証』がある事を。

――と、

「――雪だ」

堀川さんが言うとおりの、夜空から白い雪が降っている。

初雪だ。

いくつかが堀川さんの伸ばした手の上に落ち、彼女の温度に触れてすぐに溶けた。

「湯浅さん雪ですよ雪。凄い！ 初雪の瞬間見ちゃった！」

堀川さんは寒さも忘れたようで、無邪気に笑って見せた。

その表情が、あまりにも記憶の底に閉じ込めた彼女の表情に似ていて――。

「湯浅さん、タバコ！」

ふと我に返る。

堀川さんの言うとおりの、俺の口に咥えられたタバコは、灰の部分の方が長くなってしまつて今にも落ちそうだ。

慌てて灰を落とす俺を見て、堀川さんはまた笑った。

俺もつられて笑った。

「タバコ、吸い終わっちゃいましたね」

堀川さんの声は少し残念そう。

「うん。体も冷えたし、そろそろお客さんも帰るだろうから中に入ろうか」

俺は弱々しいタバコの残り火をアスファルトに押し付けて消すと、立ち上がった。堀川さんも一緒に立ち上がる。

立ち上がり際、俺の耳元で、堀川さんが小さく呟く。

「何だか分かんないけど、雪……積もるといいですね」

俺は笑った。

通用口に入り際、雪が薄く積もっては溶けていく路地を見下ろす。後に花咲く草木は雪があった事を忘れはしないと彼女は言った。きっとどんな場所にも雪は降るのだろう。

そうしていつか春になって、等しく消えてしまえばいい。

それでも証が残ると言うのだから。

彼女の中に降った共有した時間。

俺と供にあったという記憶の雪は、もう溶けて消えてしまっただろうか。

それとも草木が芽吹く糧になったのか。

どちらでもいい。

自分は彼女の雪を糧にしている。

今、何かを咲かそうとして。

「雪、積もればいいな」

本当にそう思った。

おわり

**D I G I E S P
v e r 1 . 0 (前書き)**

不快な性描写あり。

1

一年半付き合った彼女に、衝撃的な別れを切り出されて数日。ボクは何とか生きていた。

フローリングに直接寝たせいだろうか。体がギシギシと痛い。うへえ。

大の字に寝そべったまま、ボクはジーンズのポケットから携帯を取り出した。

ピコピコ。間抜けな操作音の後に液晶に映ったのは、いわゆる出会系。

ボクは道を踏み外した。

2

女の子と付き合うと言う事がイマイチ分からない。

だから放っておいた。

自分から告っておいて失礼な話しなだけどさ。

だって仕方ないじゃないか。

何をすればいいのか。何を話せばいいのか分からないんだから。

そんなボクに、先日ついに彼女は愛想を尽かした。

当然だと思った。

それと同時にこうも思った。

「三ヶ月もたんと思ったのに、一年半ももった。スゲー。頑張ったオレ」

こんなんだからフラれちゃったんだなきつと。

3

出会い系で【あのコ】と出逢ったのは、気分がどん底な底で底なフラれてから三日目だった。

これから、その出会い系で知り合ったコの事を【あのコ】と便宜上呼ぶ事にする。別に本名を出してもボクは困らないんだけど、名前言われたってアンタら分かんないだろ？ 特にどうって事無い平凡な名前だったよ。各県に四人はいそうな名前。

【あのコ】はメールを送ると、返信はすぐに来る。前の彼女とは正反対。だからどうって話じゃないけど。

ボクと【あのコ】はその日の内に色々な事をメールで話した。内容はあんまり覚えていない。って事はどうでもいい内容だったんだな。

ああ、一つだけこんな話をしたっていうのを思い出したよ。

それは、つい三日前、ボクが彼女にフラれたばかりだった事。

不幸自慢ってやつ。

泣き言だったと思う。

4

その日の夜、ボクは別れたばかりの彼女をオカズにオナニーをした。

とたんに込み上げてくる吐き気。

喉がつまる。

とっさに手で口を押さえた。

腐の臭い。

吐き気促進。

吐きそう。

吐いた。

オエー。

食事をろくにとつてないせいだ。胃液しか出てこない。

口の端から垂れた透明な糸が、蛍光灯の光を浴びて輝いていた。携帯が鳴った。

とらなくても分かる。【あのコ】だ。

『そんな事するから。やめときゃいいのに』

スゲー。

何で分かるんだ？

ボクは【あのコ】は超能力者じゃないかと思った。

5

翌日、ボクはネットカフェに行った。

【あのコ】がチャットで話そうと言ってきたからだ。

店内は冷房が効いていて快適。珍しい事に客入りは少ない。

適当に席に着くと、ボクと同じ頃に入ってきた女の人が背中合わせになるよう、直ぐ後ろの席に座った。長い黒髪に細い銀フレームのメガネ。知的な美人って感じ。

チャット開始。

他愛ない言葉が、順調にディスプレイに並ぶ。話題は自然と昨夜

の方へと。

『なんであんな事したの？ 今更辛いだけなの？』

ボクは正直に答えた。

分からない、と。

【あのコ】は、

『彼女の事、まだ好きなの？』

何て事聞くんだと思った。

ボクの返事は変わらない。

『自分の答えすら分からないのね？』

そうかも知れない。

『答えが欲しければ、この店を出て、左へ行った所にあるスタバに行けばいいよ』

それで？

『そこに一つの問いがあるから。それじゃあ』

一方的にチャットは終了。

後ろの席に居た筈の女の人、いつの間にかいなくなっていた。

とりあえずボクは【あのコ】が言っていたスタバに行ってみようとした。

なぜまだ行っていないかって？

一応店の前まで行っただ。だけど入らなかった。

そこには、ついこの間までボクの彼女だった女の子がいた。

ボクの知らない男の前で。

ボクの知らない笑顔で。

逃げるように走って帰った。

否。

本当に逃げたんだ。

7

途中で何度も吐いた。

やっぱり胃液しか出てこない。

昨夜、彼女を想った手で、吐いたばかりなのに何故かカラカラの口を拭った。

消えない吐き気に押されてまた吐いた。

ジーンズのポケット。携帯が鳴っていた。

取る。違う手で。

【あのコ】だ。

内容は短く一言。

『ね？ 分かったでしょ？』

ボクの中、何かが切れた。

同時に辛うじて熱を持っていたものが急速に温度を失っていく。

クソみてえにくだらねえ自分に吠えた。

笑顔こぼれた彼女に吼えた。

何でも知ってる【あのコ】に咆えた。

分かっている。

分かっている！

分かっていたさ！

これが彼女にとって、ベストなんだって事はさ！

泣いている彼女に肝心な言葉を言う勇氣すらない甲斐性なしのオレよりも、アイツみたいに振舞える男の方がいいって事はさ！

だけど納得しないんだ！

オレの何かが納得できないんだ！

何か知らんがまた吐いた。

オエー。

8

家に逃げ帰ったボクは、やっぱり大の字になって天井を眺めていた。

何時間こうしていたかは分からない。

だけど、カーテンを閉め忘れた窓から見える外はもう真っ暗だ。

半分欠けた月が見える。

ポツリと呟いた。

「死のうかな……」

またポケットの中、携帯が鳴った。

今、ボクにメールをするような人間は、【あのコ】しか思いつかない。

面倒くさかったが、一応内容確認。
やっぱり軽い調子で一言。

『じゃあ死ねば？』

ボクの心は決まった。

9

時刻は深夜の十一時五十九分。
ボクは三階の自分の部屋の窓を開けた。
顔を出して下を見る。

夜は暗色のアスファルトを隠してしまい、よく見えなかった。

「……あいきゃんふらーい」

強がりで絞った声は上ずっていた。
携帯の時計を確認。
サッシに足をかける。
零時ちょうど。
テイクオフ・オレ。

10

飛んだ。

11

君に謝らないといけない事がある。

こんなボクでごめん、と。

無責任に君を好きになってごめん、と。

自分の気持ちを、正直な言葉を表現するのに、こんな方法しか選べなかったボクをどうか許して欲しい。

バカな奴だと言って笑って欲しい。

そして飽きずにボクの声聞いて欲しい。

限りなくウソ臭く、

限りなく軽く、

だけど、ボクの心の底から出た本当の気持ちを。

今日君に会えて嬉しかった、と。

その笑顔が、ボクに向けられたものじゃなかったとしても。

辛くて辛くて。しんどくてしんどくて仕方ないけれど。

それでもやっぱりボクは――

12

夜天。

空中でボクの体は変な方向にねじれていた。

天地が逆転しかかった視界で見れば、右足のジーンズの裾がサッシに引っかかっていた。

コンマ五秒の静止の後に来るのは――

鈍い音と硬い衝撃。

首。いや、正確には肩から落ちた。

うおおお痛ええええっ！

硬いアスファルトの上で上半身が一回バウンド。肺から空気が抜けていく。

一瞬遅れて腰から下が地に着いた。

がああああコッチも痛えええええっ！

激痛のあまり、深夜の路上を転がりまわるボク。

股の間が温い。物理的衝撃と精神的ショックで、小便が漏れたみたいだ。おもらしなんて小二の時以来だなあと、どこかノンキな心がほざく。

「ぐはああああ、痛え！ 息できない——ってアレ！？ 息できる！ 良かった！ 死んでない！ 死んでない！」

ボクの顔先数十センチ先で、ポケットから飛び出していた携帯が鳴った。着メロが少し濁っている。壊れた？

メールの送り主はやっぱり【あのコ】。

割れて液晶が漏れ、黒に塗りつぶされた画面は見にくかったが、言いたい事は分かる。

『死なくて良かったね』

本当に良かった。

割れた液晶と一緒に、半分欠けた月を、社会の底辺から見上げて、心からそう思った。

首がそれこそ死ぬほど痛かったが、医者には行ってない。そのせ

いだろうか？ 首が変な方向を向いたまま戻らなくなってしまった。おかげで寝にくいったらありやしない。

窓から飛んで気付いた事がある。

今からその一つを確かめに行こうと思う。

あのネットカフェへ。

やはり客入りの少ない店内。

人を探す。

……いた。

ボクは昨日と同じ席に座る。

背中席にはやっぱり昨日と同じ。長い黒髪のメガネの女の人。

表情は見えない。

チャット起動。

『いらっしやい。首曲がつてるよ』

ボクは頷く。

両手はポケットに入れたまま。キーボードには指一本触れていない。

そう。昨日と同じように。

『行くのね。彼女の所に。辛い思いをすると分かっている』

仕方ないよ。とボクは思った。

念じる。【あのコ】に届けと。

ボクは見えて見ぬフリをしていたんだ。

全部言い訳だったんだ。

弱くて臆病な自分が嫌いで、認めたくなくて、全部彼女に押し付けていたんだ。

そんなのもうイヤだ。

クスリ、とスピーカーから笑い声が聞こえた気がした。

『キミの好きな人はね。今、バス停でバスを待ってる。今からでも急げば間に合うかも』

ボクは席を立った。

やっぱり【あのコ】は何でもお見通しだ。

店からの出際、振り返ってみると、後ろの席に座っていたあの黒髪の女の人と初めて目があった。

——がんばって。

聞いた事のない筈の、【あのコ】の声が聞こえたような気がした。多分テレパシーだ。

14

ボクは走っていた。

首が痛む。

息が切れる。

だけど止まらない。

吐き気がした。

なけなしの根性で我慢。

昨日までの言い訳だらけのボクはいらない。

難しい事なんていらない。

そんなものは全部窓から飛べ！

今は再び灯った自分の中の熱を信じるしかないじゃないか。

だから——

人波の向こうのバス停、何度も想った女性の姿。

ボクは有りったけの勇気でもう一度飛んだ。

【おわり】

キミのメロディ

機械の扱いというものがイマイチ分らない。

家電、パソコン、携帯電話。

どれもこれも現代人の文化的生活に必要なものだが、そのどれも使いこなせない。

見たい番組の予約録画も出来ないし、エアコンのタイマーも使えない。ウチの電子レンジはオーブンにもなるそうだが、どのボタンを押せば良いのか皆目見当がつかない。と言うより、電子レンジのタイマーも設定できない。レンジの上には常にストップウォッチが置いてあり、加熱中は目が離せない。

「はい先輩。これで大丈夫ですよ」

眉間にしわを寄せて考え込んでいると、後輩がノートパソコンから顔を上げた。

「つか先輩。機械オンチにもほどが有りますよ」

今朝がた、提出期限の迫るレポートを仕上げようと、学校から支給されたノートパソコンをおっかなびっくり使っていたのだが、突然画面が真っ白になって動かなくなった。

そこでパソコンに詳しい後輩を捕まえて復旧を頼んでいたわけだ。

「すまん。こういう時、機械に明るい後輩がいてくれて本当に助かるよ」

「あのですねえ、オレだってそんなにパソコン詳しいわけじゃないんですよ。普通なんですよ普通」

「お前レベルで普通なのか……」

「そうですよ。あの、先輩。一応聞きますが、パソコンの電源の切り方分かります？」

なんだ。それくらい分かるぞ。

「分かるさ。このボタンを押せば良いんだろ？」

後輩は深くため息をついた。

「あの、先輩。先輩に対して非常に失礼なのは承知で言わせてもらってもいいですか」

「いいよ」

「アンタ、バカじゃねえの？ テレビと一緒にすんなよ」

怒られた。一体何がいけなかったのだろう。

パソコン復旧のお礼は、学食のカツカレー豚汁付きになった。

「先輩。いつまで経ってもそんなんじゃない、出来たばかりのカノジョに愛想尽かされますよ」

いきなり深く切り込まれ、飲みかけた麦茶を噴き出してしまった。

「わ、先輩汚ねえ!」

「げは、そ、そうかな」

「そうですよ。だって先輩。メールすら出来ないじゃないですか」

そのとおりだった。携帯電話を持ったのは結構前だが、電話しか使用していない。それも電話番号をノートにメモして、番号を直接入力しているのだ。

「メールは恋人同士を繋ぐ電子の恋文。会えない日々も、寂しい夜も、メールで繋がるハートとハート」

カツカレーをうっちゃって、よく分からない事を言う後輩。

「それを先輩、出来ないなんて。先輩。付き合い始めてどんだけなりましたっけ?」

「ん。二週間かな」

「あー良いなー。一番楽しくてワクワクする頃じゃないですか。ウレシハズかしな頃ですよ。そんな好き好き大好き超愛してるカノジヨさんが、先輩と正反対な、メールをバンバン送れて、家電もパソコンも詳しい男になびいちゃったらどうします?」

脳裏に、ノートパソコンと携帯電話を持った見知らぬ男と、樂しげに腕を組む彼女の姿が浮かんだ。

見知らぬ男が爽やかに言う。

『この空気清浄機はね。マイナスイオンが出るんだよ。加湿器にもなるんだ。このテレビはプラズマなんだよ。地デジも見れるし、3Dなんだ』

彼女が笑う。

『まあ素敵』

そして、膝を付き、惨めに泣き崩れる自分。

『サヨナラ』と言う永別の言葉がエコーする。

『メールも送れない男なんて』と言う存在否定の言葉がリフレインする。

何という残酷無残。

何というグランギニョル。

デウス・マキナは降臨せず。

嫌だ。嫌過ぎる。

そんな未来は見たくない。

そんな未来は断固拒否したい。

だが、現に自分はメールも送れず、予約録画も出来ない有様なのだ。

「あ、あの先輩？」

「う、ううう。メールがあ……メールを送れたら……」

「先輩？ 今オレが言ったの全部架空の話ですからね？ 何も先輩のカノジョさんが、先輩を捨てるって決まった訳じゃないですからね」

「おのれえ……地デジめ……お、お、おおん」

「ちょ！ なに泣いてるんですか！ 周りの人たち何事かと思つて
ますよ！ 大丈夫ですから！ 保健室とか良いですから！ この人
ちよつと情緒不安定なんです！」

午後の授業はさっぱり頭に入つてこなかった。

机の下で、先生に見えないように携帯電話を操作する。

むう、とため息。

あの後、学食で後輩からメールの送り方を習ったのだが、いまい
ち 踏ん切りがつかない。

一応、彼女のメールアドレスは手帳にメモしてあるのだが……
ええい、ままよ！

カバンから手帳を取り出し、チマチマと手こずりながらも何とか
アドレスを入力。

南無三！

メール送信。

届け電子の手紙。

届けこの想い。

送った内容は『今授業中』の一文。

緊張から解放され、ふいに冷静になる。

学生同士で同級生なのだから、授業中なのは当たり前ではないか。
しかも、この時間は同じ授業を選択しているではないか。

バカか。内容とともにバカか。

ひいひい、と悲鳴をあげそうになった。

戻れ！ 戻れ！ 戻ってくれメールよ！

無慈悲にも、一回送信してしまったメールを呼び戻す事は不可能
らしい。

静かに、机に突っ伏して悶絶していると、返信が返ってきた。

緊張しつつ開封。内容は、『私も』。

天にも昇る気分だった。

見れば、離れた席で女友達と座る彼女が、こちらに小さく手を振っていた。

これが、後輩の言っていた、恋人同士の電子の恋文という事か。この至福の感覚が、メールで繋がるハートとハートという事か。嬉しすぎる！

と、

「あー。授業中の携帯電話のご使用はご遠慮下さい」

気がついたら先生が隣に立っていた。

翌日、またも後輩を捕まえて学食。

「ふっふっふー。ついにメールをマスターしたのだよ」

「あーそうですか」

後輩の前にはカツ丼と豚汁。奢った理由は特にない。

「昨日の夜もメールしてな、『おやすみ』って送ったら、『おやすみ。また明日ね』だって。くあー幸せだあ。見る？ 見たい？ 見たいよな？ しょうがないなあ。ちよっとただけだぞ、一瞬だけだぞ」

「うわー。奢ってもらってなんですけど、スゲーうぜえよ先輩。てか、他人にメールは見せるもんじゃないです。先輩は良くて、カ

ノジョさんが嫌がるかもしれないです。あと、なんかムカつくんで」

言いながら後輩は豚汁をズズズと啜った。

「……それにしても、見事にメールにハマりましたね。予想はしてましたけれど。まあ、先輩みたいな人は、一回ハマりこむと行くところまで行きますしね」

「ああ。みんな携帯電話を手放せない理由が分かったような気がするよ」

と、テーブルに置かれていた後輩の携帯が色鮮やかに輝き、テンポの良いメロディが流れた。

「電話、出なくてもいいのか？」

「いえ。フリーメールなんで、出なくても大丈夫です」

「見なくても分かるのか？」

「はい。オレ、友達とか学校とかバイトとかで着メロ変えてあるんですよ。この着メロで青色に光ったなら、ビデオ屋のフリーメールっすね」

そんな事も出来るのかと、内心驚愕した。

「まあ、オレがこういう細かいのが好き、って言うのもありますけどね。友達の中には、全部着信音1に設定してる極端な奴もいますよ。あ、どうっすか？　せっかくだし先輩も着メロとか設定してみませんか？　オレ教えますよ」

「え、いや、いいよ。なんか、架空請求とか詐欺とか、色々怖そうだし」

「新世界を恐れる者に栄光なし！」

思わず尻ごみしてしまったボクの背中を押したのは、後輩の強烈な言葉だった。

月額315円の着メロサイトを紹介してもらい、その日の内に登録した。

パケット通信料というものの正体も、後輩に説明してもらった。だけど、一曲もダウンロードする事なく、一週間が過ぎた。

どの曲を彼女からの着信に当てれば良いか、分からなかった。

一週間の間に、何通もメールでやり取りをした。

些細な事で、ちっぽけな事で。

別に奇跡的な事が起きたわけでもなく。

世の中にはありふれている事なのだろうけど。

『今バス停。もうじき着くよ』とか。

『今日お昼ご飯どうしようか』とか。

『あのマンガの新刊出てたよ』とか。

三行にも届かない文字のやりとりでボクの心は満たされていく。受信ボックスのフォルダにキミの名前が並ぶこと。

それが幸福だと感じる。

そうだ、と思った。

「今流れてるこの曲、好きだな」

ってコンビニでキミが呟いたあの曲を、キミからの着信音にしよ
う。

最初聞いた時はそれほど良いとは思わなかったけど、何度も聞く
うちに好きになった。

ボクの携帯から光って流れる。

キミのメロディ。

——おわり——

黄色いバス

気が付くと、黄色いバスに乗っていた。

どこまでも広がる草原に、どこまでも真っ直ぐに伸びる道路。

時速四十キロで緩やかに走るバスの中、ボクは一番後ろの席に座り、淡くまどろみながら窓の外を眺めていた。

雲一つない空の青さと草原の緑が織り成すコントラストが美しい。ここはどこだろうか。

いつの間にボクはバスに乗ったのだろうか。

と、バスがゆっくりと速度を落とし始めた。

半分眠ったままハッキリとしない目をやると、停留所の看板が見えた。

プシュー、と音をたてて乗車口が開き、何人か乗り込んできた。

「あ

小さな声が出る。

彼らは全員顔見知りだ。

向こうもボクに気付いたようだ。

「ひさしぶり」とか「今何やってんの？」とか口々に声をかけながら、ボクの近くのシートに腰を落ち着ける。

乗車口が閉まり、黄色いバスがゆっくりと走り始めた。

彼らはボクの小学校時代の友人達だ。

もう何年も会っていない彼らと自分の近況を語り合いながら、黄色いバスは真っ直ぐに伸びる道路を走り続ける。

十分ほど走った所だろうか。

バスが止まった。

停留所だ。

小学校時代の友人達は、

「俺達ここまでだから」

とボクに言い残し、降りていった。

代わって乗り込んできたのは、やっぱり顔見知り。ボクの中学時代の友人達だ。

「よう」とか「元気してるか」とか言いながら、ボクの近くの席に座る。

そして彼らと中学時代の思い出を語りあうボク。

黄色いバスは進んでいく。

どこまでも広がる草原の中、地平線の向こうまで続く白い道路を。

気が付くと黄色いバスはボクの知り合いでいっぱいになっていた。

中学時代の友人達は、次のバス停で降りた。

そのバス停で高校時代の友人達が乗り込んできた。

高校時代の友人達も次のバス停で降りた。

そのバス停では、大学時代の友人達が乗り込んできた。

黄色いバスは進む。

すぐに降りる人もいれば、ボクと話し続ける人もいる。

全員と色んな話をした。

一緒に楽しかった話をした。

一緒に悲しかった話をした。

一緒に面白かった話をした。

一緒に切なかった話をした。

一緒に喜んだ話をした。

一緒に辛かった話をした。

ああ。

その全てが今はもう遠い思い出。

彼らと。

彼女らと。

ともに過ごした日々の記憶。

黄色いバスは走り続ける。

どこまでも。

一直線の道を走り続ける。

次第にバスから降りていく人が多くなっていった。

「じゃあな。楽しかったよ」

「私、ここだから。元気でね」

ボクは黄色いバスから降りていく彼らを、笑って見送る。

「——それじゃあね。みんな元気で。いつかどこかでまた今日みたいに会えるといいね」

と言って。

……だけど。

本当に言いたかったのはそんな事なんかじゃないんだ。

ボクが本当に言いたかったのは——

——行かないで。

——ずっとボクと一緒にいてよ。

——みんなと別れるのは寂しいよ。

どこかボクとは違う場所に向かう彼らを引き止める言葉ばかり。
泣き言なんだ。

弱音なんだ。

本当に言いたかったのは。

別れの時、みんなに言いたかったのは。

黄色いバスから降りていった彼ら。

もう一度ボクは彼らと会えるのだろうか。色んな話をできるのだろうか。

いつか。

どこかで。

今日みたいに。

気が付くと黄色いバスにはボクと先輩しかいなかった。

あんなに多くいたボクの友人達は、それぞれ違うバス停から降りていった。

それが今はボクを含め二人だ。

黄色いバスがゆっくりとブレーキを効かし、速度を落とし始めた。

「それじゃ」

と言って先輩は腰を上げる。

思わず先輩に声をかけていた。

「先輩まで、このバスを降りるんですか」

言ってから後悔した。

それは口にしてはいけなかった事。

「先輩まで行ってしまうんですか」

だけど、最後の一人だった先輩が去っていくのを、ボクは笑顔で見送る事なんて、とてもじゃないが出来なかった。

泣きそうな顔をするボクに、先輩は困ったような顔をし、

「これはね、普通の事なんだ。人は出会い別れるものなんだ。悲しく辛い事だけど、どこにでもある普通の事なんだよ」

ああ。

分かっています先輩。

こんなにも悲しくて辛い事が、どこにでもある普通の事なんだ、
って事は。

涙が頬を伝っていた。

滴がシートを点々と濡らす。

膝の上で握った拳が震えていた。

「……………みんな、たまたまこのバスに乗合わせただけなんです」

声を絞り出す。

「違う停留所から乗ったみんなが、偶然に同じバスに乗ったんです
ね」

先輩は無言。

「ボクと行き先の違うみんなは、それぞれの向かう場所に行ったんです
ね」

先輩は頷き答えた。

「そうだね。みんな行き先が違う。キミも私も。それぞれ一人一人に、ちゃんと自分が目指す場所があるんだ」

「先輩にも行くべき場所があるんですね」

「行くべき場所かどうかは分からない。だけど行ってみようと思う。行って面白くなければ、また違う場所に行ってみるだけさ。……この黄色いバスに乗って」

目に溜まっていた涙を、硬く握った拳で拭いボクは笑った。

「またどこかで会えますか」

「きっと会えるさ」

「約束してくれますか」

「約束はしない。そんなものは必要ない。きっと私以外のみんなもそう思っているはずだよ」

ああ。

そうだ。

あの頃出逢ったボクらに、約束なんてなかった。

そんなものなんて必要なかったんだ。

そうだ。

きっと。

いつか必ず。

ボク達はまたどこかで会えるはずだから。
いつかどこかで。

たとえば街角で。

たとえば図書館で。

たとえばファミレスで。

今日みたいに。

また一緒に笑いあえるはずだから――

先輩もいなくなって、黄色いバスはボク一人になっていた。
いや。

そういえばもう一人乗ってるじゃないか。

シートを立ったボクは、小気味良く揺れる車内を前に進んでいき、

「このバスはどこまで行くんですか」

運転手さんに声をかけた。

運転手さんは答える。

「どこへでも。アナタの行きたい場所になら、どこへだって行きますよ」

「それなら――」

気になっていた事があった。

黄色いバスには、ボクの友人知人が全て乗り込んでいた。
だけど、ただ一人。

この黄色いバスに乗ってなかった人がいるんだ。
ずっと気になっていた。

キミが今どこでなにをして、なにを思い日々を過ごしているのか。

話をしたかった。

顔を見たかった。

ボクは運転手さんに目的地を告げる。

「――今すぐにも会いたい人がいるんです」

それだけで充分だ。

バスは速度を上げていく。

空の青と、草原の緑が流れていく。

今すぐキミに会いにいくよ。

この黄色いバスに乗って。

――END

楽園

——僕たちは『楽園』を見つけた。

『そこ』には何も無かった。

いや、正確には古ぼけたボロボロのベンチが三脚あった。後は何も無い。

本当にそれだけ。ベンチ以外は何も無かったんだ。

でも、僕たちにはそれで充分だった。

僕たちは『そこ』を見つけた日から入り浸るようになった。

『そこ』には屋根すら無かったから、晴れた日はみんなが集まって日向ぼっこ。雨の日は多分誰も『そこ』には行かなかった。

ある日、僕と一緒に『そこ』を見つけた仲間が言った。

「ここは楽園だ」と。

確かにそうだ、と僕たちは思った。

そしてその日から僕たちは『そこ』を『楽園』と呼び始めた。

何もない。

何もしなくていい。

何も望まれていない。

苦しみも、

悲しみさえも無く。

あるのは、

穏やかな太陽の日差しと、

緩やかに吹く風と、

古ぼけたボロボロのベンチ。

それと僕たち。

それだけで充分だ。他には何もいらぬ。

だってそうだろう？

こんなにも満ち足りてゐるのに。

こんなにも幸せなのに。

辛すぎる苦しみも、

泣きたくなるような悲しみも、

寂しすぎる孤独も、

この『楽園』には存在しない。

この『楽園』には頭の固い大人たちが作ったルールも届かない。

僕たちの

僕たちだけの

秘密の『楽園』。

僕たちはその場所で、誰にも迷惑にならないように気をつけながら、静かに、古ぼけたボロボロのベンチに寝転んで、青く澄んだ空を流れる雲を眺めて過ごした。

ずっとこんな日々が続けばいいと思った。

ずっとそんな日々が続くと思った。

ずっと……

ずっと……

……だけど、

『終わり』と言うものは常に唐突にやってくる。

その日も昨日と同じように僕たちは楽園へ向かった。
いつもと同じ気持ちで。

ところが、僕たちの方はいつもと同じ気持ちでも、楽園の方はそうではなかったらしい。

いつもと同じのいつものベンチ。

そこには知らない誰かが寝そべっていた。

誰にも話していないはずの僕たちの聖域にズカズカと土足で踏み込んできた侵入者は、僕たちに気づくなり言った。

「やあ。君たちもここを見つけたのかい？　ここはいい所だね。うん、天気もいいし、実にいい」

僕たちは嫌な予感を胸中に感じながら言った。

「はい。僕たちはここを楽園と呼んでいます」

侵入者は、まるで自分が楽園の主となったかのように言ったものだ。

「楽園、ね。まさにこの場所はそう呼ばれるに相応しい。そうだ。この楽園を他のみんなにも教えてあげよう」

嫌な予感的中してしまった。

それは決して僕たちが望まなかったもの。

望まなかった楽園のカタチ。

僕たちだけの僕たちの秘密の楽園は、今、そのカタチを変えようとしている。

僕たちの顔色があまりよくない事に気づいた新しいカタチの楽園の主は、

「どうしたの？ まさか、君たちはこんなに素敵な場所を秘密にしておくつもりなのかい？ それは自己中心的な考えだな。こういうことはやっぱりみんなで分け合わなくては」

僕たちは何も言えなかった。

言えるはずがない。

言えるはずもない。

言っている事は向こうが正しく、楽園を独占しようとしていた僕たちが一方的に悪いのだから。

——そして、その次の日から僕たちの楽園は、僕たちの手を離れ、『みんな』の楽園になった。

人が一人、また一人と増え、

雨風や強い日差しを遮るために屋根が作られて、

古ぼけたボロボロのベンチは修理され、ペンキを塗りなおされてピカピカになって、

人が増えてベンチが三脚じゃ足りなくなったので何脚かベンチが新しく追加されて、

誰かがラジカセを置いていき、音と言えば、風の音と僕たちの声しかなかった楽園に音楽が流れ始めて、

何もかもが変ってしまった。

変り続けるこの世界で、唯一変らないものがあるのだと思ったのに。

そう信じていたのに。

楽園は僕たちが思った以上に脆弱で、その崩壊は僕たちの想像以上に早かった。

あの日、僕たちが寝そべって、流れる雲を眺めたベンチには恋人たちが座り、肩を寄せ合っている。

あの日、僕たちがふざけてじゃれあった場所にはスポーツで汗を流す若者たち。その隣では様々な楽器をみんなが持ち寄り、小さなコンサートが開かれていた。

その様子を、まるで夢の世界の出来事のように見つめていた僕たちの脇に、今や名実ともに楽園の主となった最初の侵入者が立って言った。

「どうだい？ みんな楽しそうだろう？ ここは昔、君たちだけだった時と違い、活気と笑顔に満ちている。本当の楽園とはこういうものの事を言うんだよ」

そうだ。

ここは楽園だ。

みんなが楽しく、笑顔でいられる場所。

そう。これが楽園の本当の姿。あるべきカタチなのだ。

楽園は一部の人間に独占されるものじゃない。

そんな事は分かっている。

でも、

でも、これは、僕たちの望んでいたものじゃない。

『みんな』が、

『あなた』が望んだものだ。

大きすぎる全体。

小さすぎる個。

正当な全体。

間違った個。

その事を僕たちは知っているから。

『あなた』が正しい事を知っているから。

認めつつも納得する事が出来ない己の矮小さ。

心の内に見えない陰となって潜む矛盾。

苦しみのないはずの楽園に、それが生まれていた。

悲しみのないはずの楽園に、それが生まれていた。

だから僕たちは『そこ』を去った。

たまに僕は思う。

楽園にいた日々を。

永遠じゃない時の中で永きを望んだ青い日々を。

あの日の楽園は、もう記憶の中にしかなく、美しい思い出と言えるほどに綺麗なものではないけれど、それでも僕は絶対に忘れない。
小さな楽園の中で永遠の夢を探した事を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7170t/>

短編集04 【Life-Live】

2011年6月16日03時08分発行